

作物名：麦類

病害虫名：赤かび病（病原：Gibberella zeae）



オオムギ被害ほ場



オオムギ発病穂



オオムギ被害粒



こぼれムギの秋期発生



コムギ発病穂



コムギ発病穂



コムギ被害粒



節部の発病



子のう殻

### 1 被害の特徴と診断のポイント

ムギの乳熟期ころから穂に発生し、小穂が点々と褐色になり、一部または全部を褐変枯死させる。枯れた穎の合わせ目に沿って桃色のカビ(分生子塊)を生じ、のちに黒色の小粒(子のう殻)を生じる。発病は穂が主体であるが、茎、葉身、幼苗などにも発生する。甚だしいときには60%以上減収する。

赤かび病菌が産出するかび毒「デオキシニバレノール(DON)」は、人畜に中毒症状を引き起こすおそれがある。そのため、現在、厚生労働省により小麦に含まれるDONの暫定的な基準値は1.1ppmと定められている。また、農産物規格規定で、赤かび病被害粒率が0.0%（正確には0.05%）を超えた麦類は規格外に格付けされる。

### 2 伝染源及び伝染方法

菌糸、分生子または子のう胞子が、被害種子や稈のほか、稲刈株などに付着または寄生して越冬する。翌春の第1次感染は子のう胞子によるが、その後は穂の病斑上に生じた分生子によって第2次伝染すると考えられている。ムギの穂に胞子がつくと、発芽して穎の気孔や内側の表皮、あるいは残っている葯などから侵入する。

### 3 発病・伝染好適条件

開花期前後にかけて降雨が続き、気温が20～27 の場合に発生が多くなる。特に、開花から10日程度の間が最も感染しやすい。

### 4 防除方法

#### (1) 化学的防除

- ・ 出穂期前後から曇天多雨でかつ温暖な気候が続くような年は、薬剤散布を励行する。
- ・ 開花始期～開花期に第1回目の防除、その7～10日後に第2回目の防除を徹底する。赤かび病抵抗性の弱い「ゆきちから」は、2回目防除の7～10日後に3回目の防除を追加する。

#### (2) 耕種的防除

- ・ 発生ほ場から採種しない。窒素肥料の多量追肥を避ける。排水対策を講じる。
- ・ 粒厚選別や比重選別も、赤かび粒の除去に有効な手段である。

### 5 出典

- (1) 参考文献：みやぎの麦類・大豆栽培技術指導指針（宮城県）  
原色病害虫診断防除編1（農文協）  
日本植物病害大事典（全国農村教育協会）

- (2) 写真：宮城県病害虫防除所撮影